

学生国際協力団体 CHISE

尾内 夏歩, 大橋 茜 (学生国際協力団体 CHISE 2 年生), 乾 美紀

キーワード: 国際協力, 教育支援, 識字教室

1. 団体概要

学生国際協力団体 CHISE (チーズ) は、ラオスの子ども達の教育環境の改善を目的として 2009 年に設立された。『「はいチーズ」の一言で世界に広がれピースの輪!』をコンセプトに掲げて活動している。現在のメンバー (20 名) のほとんどが環境人間学部の学生だが、他にも理学部、国際商経学部、看護学部、また関西学院大学の学生も所属している。

具体的な活動地は、ラオスの山岳地帯に位置するルアンパバーン県の郊外にある農村地域である。これまでに CHISE は小学校の校舎を 4 校、幼稚園を 1 校完成させた。2020 年以降は、コロナ禍の影響を受け、現地での活動を中断していたが、オンライン上で交流活動を継続的に行った。その中で、コロナ禍でも村のニーズに合わせた支援ができることを実感した。そして、ついに 2023 年から現地での活動を再開した。オンラインとは異なり、自分たちの目で見て、対話することで今後の支援に大きく影響する情報を得ることができたため、以下に報告していきたい。

2. 具体的な活動内容

2.1 ラオス語教室の実施

CHISE は 2022 年 6 月より、ルアンパバーン県にある「ロンロード村」を主な支援先としていた。ロンロード村の子ども達は少数民族であるモン族であり、日常生活ではラオス語ではなくモン語を話している。学校ではラオス語で授業を行うため、ラオス語の習得が必須だが、現地の子ども達は小学校高学年に上がってもラオス語の読み書きができないという課題があった。その原因として挙げられたのが、村に幼稚園がなく、小学校入学前にラオス語に触れる機会がないということであった。幼稚園がない理由として、教員 1 人を派遣するのに必要な子どもの人数が揃っておらず教員が派遣できないこと、人数が揃ったとしても、村人でお金を集めて教員に給与を支払うのは難しいことが挙げられた。



写真 1 識字教室で勉強する幼稚園児の様子

そこで、CHISE はボランティア教員に給与 (月額 2 万円) を支援し、幼稚園生を対象にラオス語の識字教室を開いてもらうプロジェクトを始めた。3 ヶ月ごとにラオス語のテストを行うと、点数が大幅に伸びており、村人へのインタビューでも、「小学生よりも、ラオス語教室に通っている子どもたちの方がラオス語がうまい」、「子どもたちが文房具を欲しがったり、学校に行きたがったりするようになった」などの声を聴くことができ、CHISE・村人共に効果と必要性を感じていた。ラオス語教室を継続的に行うことによって、まったくラオス語に触れないまま小学校に入学することを避け、スムーズな移行をすることができる。それに加えて、ラオス語教室は村人と教員、教育局と学校などの連携を強化することができる点、焼き畑の時間を考慮するなど、村人のライフスタイルに合わせる点で、出席率の向上も期待できるものであった。

2.2 自立に向けた課題とその克服

しかしながら 2023 年 3 月、コーディネーターを通して村人へ「CHISE が支援を辞めても、ラオス語教室は続けるか。」と質問したところ、「支援がなくなったら自分たちでは続けることができない。」と言われてしまった。元より CHISE は村の自立を目的としていたため、今後の支援を続けるか否かが議論になった。結果として、上述したとおり、村人へのインタビューなどから識字教室の必要性を感じ



写真2 ホエイカン村の子ども達と交流する CHISE



写真3 県内のイベントで伝える活動を行う様子

たため、2023年の10月まで支援を続けることとなった。支援終了予定を伝え、どうにか村人同士で教室を続けることはできないかと話し合ってもらった。その結果、驚くことに村人から「村人でお米を出し合い、教員のお給料とする。」と自分たちで続ける案を出した。こうした具体的な案から自立が見られたため、今後は定期的にオンラインで視察し見守っていく予定である。

2.3 その他の支援・活動

また、ロンラード村以外にも同県にあるホエイペン村、ホエイカン村、コックハン村へ昨年2回の訪問を通して文房具や衣類の寄付を渡し、様々な村との交流を行った。9月には耳の不自由な子どもが通う聾啞学校を訪れ、同校には卒業後に刺繍や織物を作る職に就く子どもが多いことからミサンガ作りと名札作りの授業を行った。

さらに、2023年3月の現地訪問の際に訪れた同県の「プークー村」では運動会を行って子どもと関係を築き、9月には名札作りと楽器作りを行った。ラオス語で名前を書く様子を見ることができ実際にラオス語教室の成果を感じることができた。また、同村からは、9月に遊具が欲しいという要望を受けたため、CHISEから資金支援をして遊具建設も行った。こうした現地での支援を実現する資金を集めるために週末に神戸での募金活動や、学園祭での出店も行っている。日本での活動としては、先に述べた資金集め以外にも週に1回のミーティングと高校や大学の授業、その他イベントでの講演会も行っている。

3. 今年度の成果

今年度は兵庫県立丹波篠山産業高等学校と交流

し、高校生たちが教育支援について考えるきっかけ作りを行うことができた。その結果、ラオスの学校支援をしようと篠山産業高校の生徒さんたちが募金活動を行い、集まったお金を寄付していただいた。また、その様子が読売新聞に掲載された。その他にも「広報さんだ」には三田市立富士中学校の生徒さんから、文房具の寄付をいただく様子が掲載された。さらに、第11回国際教養学会（同志社大学）において「なぜ子ども達はラオス語を知らないのか～ラオスの少数民族の村における国際教育支援とその効果に関する研究～」というテーマで優秀賞発表賞を受賞することができた。今年度の成果を元に、これからも我々の活動を通してラオスの教育の現状についてより多くの人に知ってもらえるよう励んでいきたい。

4. 今後の展望

2023年の春から現地訪問をすることができるようになったため、今後はより一層現地との密な交流を大切に、村のニーズに合わせた質の高い支援ができるよう努めていきたい。これまで支援していたロンラード村の自立が見られたことから、2024年3月の現地訪問では、新しい支援先を探すため、いくつかの村を訪問する予定である。実際に現地訪問をすることでしか得られない情報を収集することで、村の自立的な教育を目標とした支援を行っていければと考えている。年に1回の現地訪問と、オンラインでの視察を組み合わせることにより、継続的な支援活動を行っていきたい。また、日本では、高校や大学への講演会や、募金活動も継続して行うことで、ラオスの教育の現状を伝えていきたいと考えている。